百済および日本の垂木先瓦に関する二、三の考察

千田　剛道

1. はじめに　－研究のあゆみと本稿のねらい－
2. 百済の垂木先瓦
3. 百済と日本の垂木先瓦に関するいくつかの問題
4. おわりに

要　旨　垂木先瓦は、宮殿や寺院建築などの屋根の垂木先端にとりつける瓦である。軒丸瓦や軒平瓦とならんで、軒先を飾る瓦として目に触れやすい建築部材のひとつでもある。垂木先瓦に関しては、1938年の石田茂作の研究が先駆的なものであろう。石田は、日本の垂木先瓦の源流が百済にあることを軍守里寺址の実例をあげて指摘している。その後、日本でのまとまった研究はほとんど見られないが、小田富士雄による北九州での垂木先瓦の紹介、花谷浩による飛鳥地域の垂木先瓦の検討などが、垂木先瓦を論じた数少ない研究であろう。一方、百済の故地では、定林寺址、弥勒寺址をはじめ、近年の陵山里寺址などの寺院の発掘調査の進展により、垂木先瓦の出土も報じられ、石田の段階と比較して、遺跡の出土状態との関連で考察できる資料が増加している。本稿では、以上のような調査・研究の成果に学びながら、日本古代の垂木先瓦の直接の源流である百済の遺跡から出土した垂木先瓦の観察からはじめて、百済における垂木先瓦を概観し、古代日本への影響についても若干触れた。

キーワード　垂木先瓦　花弁　中房　釘穴

奈良文化財研究所　企画調整部

1. はじめに　－研究のあゆみと本稿のねらい－

垂木先瓦は、瓦葺き建築の屋根の垂木先端にとりつける瓦である。軒丸瓦や軒平瓦とならんで、軒先を飾る瓦として目に触れやすい建築部材のひとつでもある。

日本古代の垂木先瓦に関する先駆的な研究に石田茂作の論文がある[1]。石田は、当時知られていた古代朝鮮と日本の資料にもとづき、垂木先瓦の形態分布、年代などを論じている。その後、垂木先瓦に関するまとまった研究はほとんど見られないが、北九州での垂木先瓦を論じた小田富士雄[2]、近年では、下野薬師寺の垂木先瓦に関連して垂木先瓦の資料を概観した河野一也[3]の記述、飛鳥寺を中心に飛鳥地域の垂木先瓦を総覧した花谷浩[4]の論文などをあげることができる。

一方、百済の垂木先瓦に関しては、石田とほぼ同じ頃、村田治郎も古代朝鮮の垂木先瓦をあつかうなかで、建築学的な考察を加えている[5]。第二次大戦後になって、井内功は、百済の垂木先瓦の総括的な分類をおこなった[6]。百済の故地では、その後、定林寺址、弥勒寺址、陵山里寺址などの発掘調査の進展により、垂木先瓦の出土が報じられ、石田の段階と比較して、遺跡の出土状態との関連で考察できる資料が増加している。

本稿では、以上のような状況をうけて、日本古代の垂木先瓦の直接の源流である百済の遺跡から出土した垂木先瓦の観察からはじめて、百済における垂木先瓦を概観する。そして、百済垂木先瓦の分類、飛鳥寺の垂木先瓦と百済との関係などに触れる。

2. 百済の垂木先瓦

実見できた資料、および発掘報告書等により知りえた資料を掲げる。

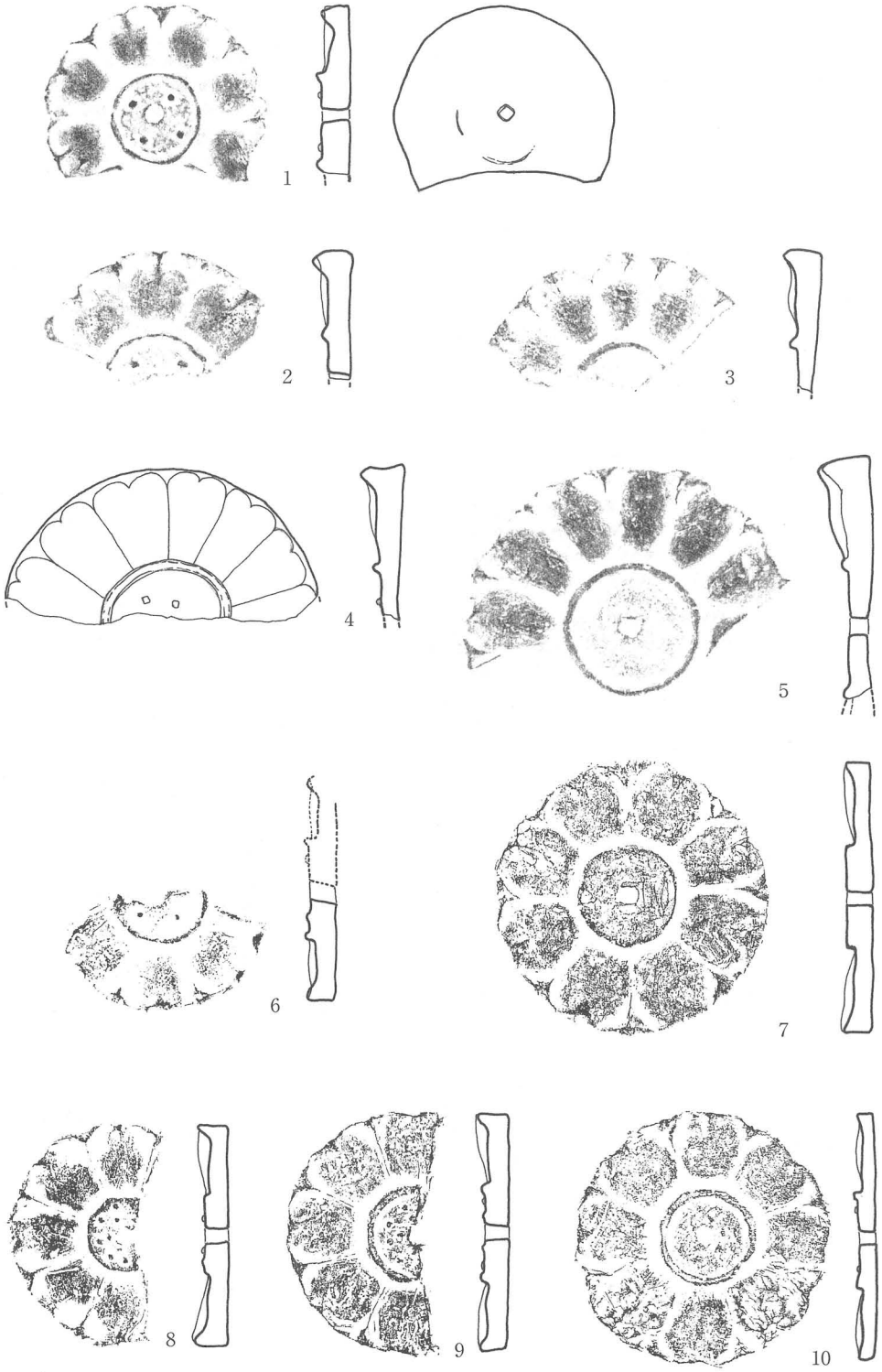
(1) 定林寺址（第1図1～5）

定林寺は、扶余郡扶余邑東南里に所在する。定林寺の発掘調査は、1942年に着手され、数年にわたって、小規模な調査がおこなわれたが、未報告である。その後、忠南大学校による、1979年および1980年の調査分が、1981年に報告された。垂木先瓦は、4種（素弁八弁2種、素弁十二弁が2種）が報告されている[7]。1～5は、いずれも中房の縁が太い圏線で表現されたものである。

1は、復原直径12.8cm、厚さ2.0cm。中房内に蓮子4個を配する。中央に一辺0.6cmの方形の釘穴がある。裏面はヘラ削りで調整する。砂粒移動痕が円弧状に残っており、あるいは、ヘラ削りには回転（左回転）を利用した可能性もあろう。

2は、復原直径が16cm、厚さ2.4cm。中房内の蓮子は2個残る。裏面は、ヘラ削りのあと、ナデで調整する。

3は、中房内に蓮子がみられない。復原直径16cm、厚さ2.7cm。ただし摩滅の著しい破片



第1図　百済の垂木先瓦　（1：4）　1～5：定林寺址、6：亭岩里窯、7～10：陵山里寺址

なので、蓮子の有無は確実ではない。

4は復原直径18cmの大型品。厚さ2.6cm。裏面はヘラ削りで調整し、ややくぼむ。蓮子は2個が残る。十二弁か。

5は、4と同様の大型品、直径18cm。厚さ3cm。4との違いは、中房の内部に蓮子を配置しない点である。十二弁に復原される。

(2) 亭岩里窯（第1図6）

亭岩里窯は、扶余郡場岩面亭岩里に所在する。垂木先瓦は、1991年の発掘調査で、第9号窯から出土した[8]。出土した2点のうち1点が図示された。中房の縁が太い圏線による表現である。中房内に蓮子を配する。6は、復原直径13.5cm、厚さ1.7cm。

(3) 陵山里寺址（第1図7～10）

陵山里寺址は、扶余郡扶余邑陵山里に所在する。1995年度（第4次）と1996～1997年度（第5次）の調査で垂木先瓦が出土した[9]。報告書によると、垂木先瓦は総計31点認められている。主として中門、および中門周辺地域から出土している。垂木先瓦の文様は、すべて素弁で、中房の形状により、第1～3の3類型に分類されている。

7は、中房が円盤状をなし、何らの装飾を加えない。直径は16cm、厚さ1.8cm。

8は、中房に蓮子が二重に配置される。直径12.7cm、厚さ2.1cm。

9・10は中房縁が太い圏線により表現される。9は、直径13.7cm、厚さ1.9cm。10は、直径14.3cm、厚さ1.2cm。

(4) 弥勒寺址（第2図11・12）

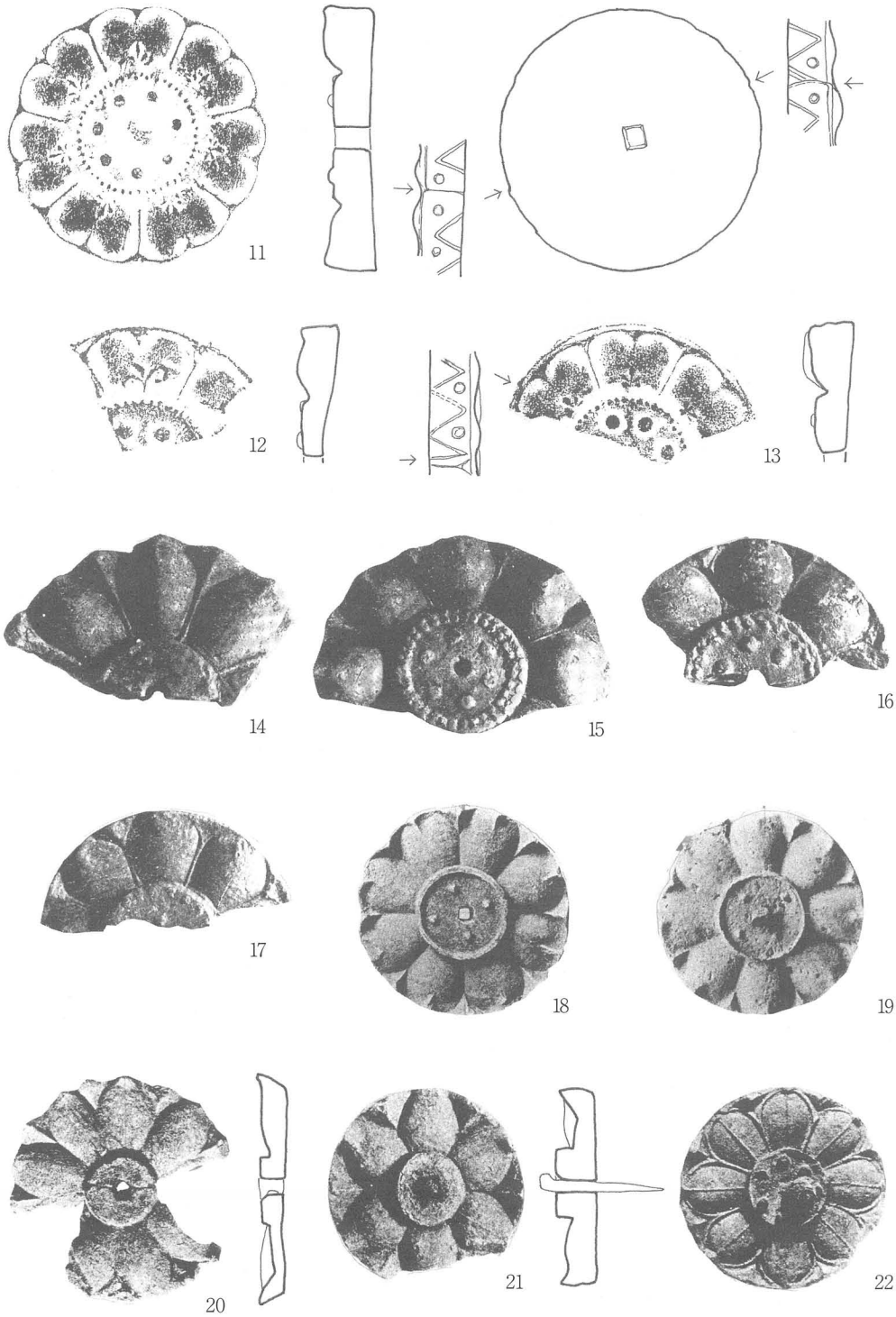
弥勒寺址は、全羅北道益山市金馬面箕陽里に所在する。1989年刊行の報告書によると、垂木先瓦が2種（A型・B型）出土している[10]。A型が圧倒的に多数を占める。いずれも7弁の蓮弁に忍冬文を飾るもので、中房縁に蕊状を表現する。忍冬文は、A型（11）が五葉であるのに対して、B型（12）は三葉である。11の瓦当側面には、珠文と鋸歯文を表現し、この垂木先瓦の成形に用いられた分割式の枷型の痕跡が残る（矢印部分）。緑釉を施す。12には、一辺1.7cmの方形の釘穴がある。

(5) 王宮里遺跡（第2図13）

王宮里遺跡は、益山市王宮面王宮里に所在する。垂木先瓦は、2001年度の調査で西北部の工房廃棄址周辺の焼土を含む層から出土した[11]。13は、弥勒寺A型と同笵である。弥勒寺例と同様、瓦当側面に分割式の枷型の痕跡を残す（矢印部分）。この個体には現状では緑釉は認められない。裏面は凹面をなし、ヘラ削り調整する。復原直径16.2cm、厚さ2.7cm。

(6) 金剛寺址（第2図14～17）

金剛寺址は、扶余郡恩山面琴公里に所在する。1963年（第1次）及び1966（第2次）年に調査され、1969年に報告された[12]。垂木先瓦は6種（Ⅰ～Ⅵ式）、総計51点が出土し、うち5種が



第2図　百済および飛鳥寺の垂木先瓦（1：4）

11・12：弥勒寺址、13：王宮里遺跡、14～17：金剛寺址、18・19：軍守里寺址、20～22：飛鳥寺

百済時代に属する。うちわけは、Ⅲ式（第2図16）が19点で最も多く、次いでⅠ式（第2図14）11点、Ⅱ式（第2図15）の8点、Ⅵ式が7点、Ⅳ式が5点、Ⅴ式が1点の順となる。金剛寺の垂木先瓦は、中房が、円盤状をなしその周縁に珠文を一重（14・17）または二重（15・16）にめぐらす点が特色である。直径は、Ⅰ式が18.4cm、Ⅱ式が17.7cm、Ⅲ式が13.2cm、Ⅳ式が14cm、Ⅴ式が9.5cmである。

(7) 軍守里寺址（第2図18・19）

軍守里寺址は、扶余郡扶余邑軍守里に所在する。1935年（第1次）、1936年（第2次）に調査され、1937年に報告された[13]。垂木先瓦は2種出土している。中房の縁が太い圏線による表現で、中房内に蓮子4個を配する。釘穴は方形で、釘を残す例がある。中央基壇からは、軒丸瓦とともに多数出土している。

なお、石田茂作によれば、「金堂の軒のくづれ落ちたと思はれる線に沿って、鐙瓦と交じり此の種の瓦が断続して発見され、其の中には中央孔に鉄釘の腐蝕付着した儘掘出されたものあり、最早棰先瓦として毫も疑ふべからざるもの丶様に感じた」と述べており[14]、垂木先瓦の用途の確定をもたらした学史的にも重要な調査といえよう。

以上が百済における垂木先瓦の主要な出土例である。

このほか、図録類によると、扶余地域では、佳増里、王興寺址、旧衙里、扶蘇山、佳塔里、臨江寺址[15]、龍井里、双北里[16]、錦城山[17]などでも垂木先瓦の出土が知られる。ただし、これらは、採集品が主であり、遺跡との関連が明確ではないので、今回の検討からは除いていることを付記しておく。

3. 百済と日本の垂木先瓦に関するいくつかの問題

まず、百済の垂木先瓦の分類に触れる。そして、これをもとに、飛鳥寺の垂木先瓦と百済との関係をとりあげてみたい。

(1) 百済垂木先瓦の分類

百済の垂木先瓦の分類に関して、これまで、まとまったものには井内功の研究がある[18]。井内は基本的に弁と中房の形状によって、第Ⅰ～Ⅲ形式の3種に大別した（第Ⅱ形式は、さらにA～Dに細分）。近年、河野一也も百済の垂木先瓦を5種に分類しているが[19]、資料、内容ともに井内の分類とほぼ同じである。

以上の分類を参考にしながら、ここでは、これらで扱われなかった資料をくわえて、改めて百済垂木先瓦の分類をこころみる。分類の視点は、弁と中房の形状にある点はこれまでの先学と変わらない。

まず、弁の分類は、大部分の花弁の形状が八弁の素弁であり、他に十二弁も知られている。七弁で忍冬文を装飾するものが少数ある。八弁の素弁のものは、中房の形状が、円盤

状をなすもの（A）と、太い圏線で表現されたもの（B）の2種がある。

次に、中房の細分である。a：何らの装飾をくわえないもの、b：蓮子を配するもの、c：連珠文を配するもの、d：蕊を配するもの、の4種が認められる。

以上により、花弁と中房の組み合わせによって、百済の垂木先瓦を第1～3類に大別する。以下に、分類名称と図版の対応を示す。

第1類：素弁八弁のうち、中房が円盤状をなすA類は、さらにAa類（第1図7）、Ab類（第1図8）、Ac類（第2図14～17）、なお、Ad類は実例としてはみあたらない。

第2類：大多数は素弁八弁であるが、十二弁もある。中房を太い圏線で表現したもの（B類）で、中房は、Ba類（第1図3・5）と、Bb類（第1図1・2・4・6・9・10、第2図18・19）とがある。

第3類：花弁が七弁で、弁中に忍冬文を飾るもの。忍冬文が五葉をなすA種（第2図11・13）と、三葉のB種（第2図12）とがある。中房はAd類のみである。

(2) 飛鳥寺の垂木先瓦と百済

飛鳥寺の垂木先瓦の祖型と、使用年代をめぐって検討する。

飛鳥寺（奈良県明日香村所在、588年創建）からは1958年の発掘調査により、4種の垂木先瓦が出土した。このうち、主体を占める2種は、素弁九弁（Ⅰ型式－第2図20）と素弁六弁（Ⅱ型式－第2図21）である。創建軒丸瓦の文様とは対応せず、直接瓦当文様の比較からその使用年代を推定するという方法はとれない。発掘報告書は、垂木先瓦のなかには、山田寺式の内区を採用したものもあるので、垂木先瓦の使用は創建時にはさかのぼらず、後に補なわれたもの、との見解を述べる[20]。しかし、飛鳥寺でこの4種が同時に使用されたとする確証はない。

そこで、筆者は、素弁の文様を百済と比較して、6世紀後半代創建の寺院（軍守里寺址ほか）に類例があること、また八弁で弁中央に隆線をおく型式（Ⅳ型式－第2図22）は金剛寺址、聖住寺など6世紀後半～7世紀代創建の百済寺院の軒丸瓦の文様に近いことを述べ、素弁の2種（Ⅰ型式およびⅡ型式）については、創建時に使用された可能性に言及した[21]。飛鳥寺の垂木先瓦（Ⅳ型式）の文様の由来に関しては、これより先、亀田修一も指摘をおこなっている[22]。花谷浩は、最近、飛鳥寺の垂木先瓦（Ⅱ型式）に彩色の痕跡をみとめ、飛鳥寺では、創建時に垂木先瓦の使用があったと主張している[23]。軒丸瓦と同一の意匠を採用し、出土状態からも創建時の使用が裏付けられる山田寺（奈良県桜井市所在、634年発願）の彩色垂木先瓦とは異なり、飛鳥寺の場合、彩色垂木先瓦の存在と創建時の使用とは直接には結びつかないように思われる。

以上のような見解を参照しつつ、筆者は、飛鳥寺垂木先瓦のうち、Ⅰ、Ⅱ型式の中房と類似した中房をもつ垂木先瓦が百済（陵山里寺址ほか）にある（先の分類ではAa類）ことにも

注目したい。すなわち、Aa類の出土した百済遺跡のうち、陵山里寺址は、塔心礎から出土した石製舎利龕の刻銘により、塔の造営の発願が567年であって、陵山里寺址の伽藍創建年代の有力な手がかりになっている。すなわち、飛鳥寺の造営に先立つ6世紀後半代に、百済にこのタイプの中房をもつ垂木先瓦の存在が明らかであって、この点からも、飛鳥寺では、この2種が、創建時に製作、使用されたとみる私見が補強されると考える。

4. おわりに

百済の垂木先瓦を実見して考えた一部を報告した。垂木先瓦の分類については、従来よりは一歩すすめたとおもわれるが、なお同笵垂木先瓦の確認が今後の課題になる。

また、飛鳥寺の垂木先瓦の祖型と、年代をめぐって私見を述べた。垂木先瓦には建築学的な面でも興味ある課題が潜んでいる。こうした点について、今後の調査・研究の進展に期待しておきたい。

謝　辞　百済垂木先瓦の実見に際して、国立文化財研究所および国立扶余博物館の皆様の御高配を頂いた。謝意を表する。

註

1　石田茂作「棰先瓦考」『銅鐸』7号、1938年。
2　小田富士雄「九州における山田寺系棰先瓦の発見」『歴史考古』6号、1961年。
3　河野一也「水道山瓦窯跡群採集棰先瓦」『古代東国の考古学』大金宣亮氏追悼論文集、慶友社、2005年。
4　花谷　浩「軒裏の華－飛鳥寺院の垂木先装飾－」『飛鳥文化財論攷－納谷守幸氏追悼論文集－』納谷守幸氏追悼論文集刊行会、2005年。
5　村田治郎「朝鮮の垂木瓦に就いて」『綜合古瓦研究　第二分冊』（『夢殿』第19冊特輯号）鵤故郷舎、1939年。
6　井内　功「百済の垂木瓦についての観察」『井内古文化研究室報』17、井内古文化研究室、1976年。
7　忠南大学校博物館・忠清南道庁『定林寺址発掘調査報告書』1981年。
8　国立扶余博物館・忠清南道庁『부여 정암리 가마터（Ⅱ）』1992年。
9　国立扶余博物館『陵寺－扶余陵山里寺址発掘調査進展報告』2000年。
10　文化財管理局・文化財研究所『弥勒寺遺跡発掘調査報告Ⅰ』1989年。国立扶余文化財研究所『弥勒寺遺跡発掘調査報告Ⅱ』1996年。
11　国立扶余文化財研究所『益山王宮里発掘中間報告Ⅳ』、2002年。
12　国立博物館『金剛寺』1969年。
13　石田茂作「扶餘軍守里廃寺址発掘調査（概要）」『昭和十一年度　古蹟調査報告』朝鮮古蹟研究會、1937年。
14　石田茂作「棰先瓦考」（前掲註1文献）。
15　忠南大学校百済研究所『百済瓦塼図譜』1972年。

16　井内古文化研究室『朝鮮瓦塼図譜』Ⅲ、1978年。
17　百済文化開発研究院『百済瓦塼図録』1983年。
18　井内　功「百済の垂木瓦についての観察」（前掲註６文献）。
19　河野一也「水道山瓦窯跡群採集棰先瓦」（前掲註３文献）。
20　奈良国立文化財研究所『飛鳥寺発掘調査報告』奈良国立文化財研究所学報第５冊、1958年。なお、型式名は、花谷浩「飛鳥寺同笵瓦二題」（『奈良国立文化財研究所年報1997-Ⅰ』1997年）の整理による。
21　千田剛道「法隆寺若草伽藍出土の鬼瓦と百済」『奈良文化財研究所紀要2005』2005年。
22　亀田修一「熊津・泗沘時代の瓦」『日韓古代瓦の研究』吉川弘文館、2006年、p.88。
23　花谷　浩「軒裏の華－飛鳥寺院の垂木先装飾－」（前掲註４文献）。

挿図出典

第１図　1：断面図・裏面図、2・3：断面図、4：瓦当面図・断面図、筆者作成、1～3拓本・5：註７文献、6：註８文献、7～10：註９文献

第２図　11・12：拓本は註10文献・実測図は筆者作成、13：拓本は註11文献・断面図は筆者作成、14～17：註12文献、18・19：註13文献、20～22：註20文献

백제 및 일본의 연목와에 관한 고찰

千田剛道 (치다 타케미치)

요 지 연목와는 궁궐이나 사원 건축 등의 지붕 연목 끝에 부착하는 기와이다. 수막새나 암막새와 함께 처마 끝을 꾸미는 기와로서 자주 눈에 접하는 건축부재의 하나이기도 한다. 연목와에 관해서는 1938년의 石田茂作 (이시다 모사크) 에 의한 연구가 선구적이다. 石田은 일본 연목와의 원류가 백제에 있다는 것을 군수리사지를 실례로 들어 지적하였다. 그 후 일본에서의 정리된 연구는 거의 보이지 않았는데, 小田富士雄에 의한 北九州 연목와 소개, 花谷浩에 의한 飛鳥지역의 연목와 검토 등이 연목와를 논한 얼마 되지 않은 연구이다. 한편 백제에서는 정림사지, 미륵사지를 비롯해 최근의 능산리사지 등 사원에 대한 발굴조사가 진전되면서 연목와의 출토도 보고되어, 石田의 단계와 비교해도 유적의 출토상태와 관련해서 고찰할 수 있는 연목와 자료 들이 증가하였다. 본고에서는 이와 같은 조사연구 성과를 수용하면서 일본 고대 연목와의 직접적인 원류인 백제 유적에서 출토된 연목와의 관찰로부터 시작하고, 백제에서의 연목와를 개관하고, 고대 일본으로의 영향에 대해서도 약간 언급하였다.

키워드 : 연목와, 華瓣, 子房, 못구멍

A Study of Rafter-End Tiles in Baekje and Japan

Chida Takemichi

Abstract : A rafter-end tile is a roof tile attached to an end of rafter in a roof of palace and temple building. A rafter-end tile is a decorative roof tile as well as flat and round eave tiles, and an impressive building component. An early study on a rafter-end tile is Mosaku Ishida（石田茂作）(1938), who argued that the rafter-end tile in Japan was originated from Baekje, showing an example of the Gunsu-ri temple site（軍守里寺址）. After the Ishida's study, a few studies have targeted rafter-end tiles in Japan, except the studies in the northern Kyusyu region by Fujio Oda（小田富士雄）and in the Asuka region by Hiroshi Hanatani（花谷浩）. In Korea, many examples of rafter-end tiles in archaeological contexts have been obtained from the excavations of the Jeongrim, Mireuk, and Neungsan-ri temple sites（定林寺址；弥勒寺址；陵山里寺址）. This paper analyzes the rafter-end tiles obtained from the excavations of the sites in Baekje and discusses their influence to the counterparts in Japan.

Keywords : rafter-end tile, lotus petals, lotus thalamus, nailing perforation